

所報

第 1 号 2007年 3 月 発行

発行人：島袋正彦

発行所：宮古島市立教育研究所

住 所：〒 906-0392

沖縄県宮古島市下地字上地 472-39

電 話：(0980) 7 6 - 6 4 0 0

F A X：(0980) 7 6 - 6 1 5 4

宮古島市立教育研究所 所長 島袋正彦

平成 1 8 年 4 月 3 日、宮古島教育関係者の 2 4 年来の夢が叶い、本研究所が開所いたしました。

本研究所の方針としては、生涯学習の視点に立って、学校教育、社会教育、家庭教育の直面している課題を積極的に取り上げ、教育実践に結びついた教育活動の推進に寄与するところにあります。

開所一年目（平成 1 8 年度）の事業として、長期研修（六か月）事業・教育相談事業・適応指導教室運営事業を挙げることができます。

長期研修事業では、開所から六か月間の準備期間を経て、昨年 1 0 月 2 日関係者の皆様方の支えにより、長期研修事業のスターをきることができました。そして、研修に必要な設備等が満足に整わない状況下でありましたが、3 月には、第一期研究教員（二人）の報告集録の作成・成果報告会の実施・修了認定式等無事行うことができました。

研究教員お二人は学校現場に戻りましても、本研究所での研究をさらに継続発展させてくれるものと確信しております。

また、作成しました研究報告集録は、各学校現場の実践におかれましてお役に立てただけのものとして期待しております。

適応指導教室「まていだ教室」の運営におきましては、年度途中（8 月）に他の場所から移転したことで、利用する子どもたちへの心配もありましたが、適応指導教室担当の先生方、関係者の皆様方の温かい支援により、3 名の子どもたちを学校へ復帰させることができました。

また、教育相談事業に関しましても、1 月に本教育研究所と同建物内に移転が行われ、本研究所の運営が、ここ下地庁舎を中心に本格的に行われつつあります。

今後は、施設内の旧議場の有効な活用、図書資料室の充実、各関係機関との連携を通して、研究所運営の充実に努めていきたいと考えております。

今後とも、本研究所の事業に、ご理解とご指導を賜りますようお願い申し上げます。





研究との出会い



平成18年度後期（第1期）研究教員
宮古島市立久松小学校
教諭 与那覇彰子

春の訪れ、陽気な天気・・・ふと耳をすますと、研究の終了を喜ぶかのように小鳥のさえずりが心地よく耳に入ってきます。

音読について、もっと深めてみたいと思っていた時、教育研究所の開設というタイミングの良さで、私は研究をすることができ、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。思い起こせばこの6か月、貴重な時間の流れでした。研究がスムーズに進む日もあれば、いきづまる日も・・・いきづまった時、研究室の窓から見える海、それと飛行機の離発着をよく目にし、まるで「頑張れ」と励まされているかのように、心を癒されたものです。

6か月という月日の中で、研究以外のいろいろな事も学ぶことができ、「充実」した研究期間となったものです。2月、私は、全国国語教育研究大会に参加する機会があり、自分の試みていることを、この目で確かめることができたことや、参考にさせていただいている全国国語教育研究会名誉顧問の瀬川栄志氏や、文部科学省教科調査官の井上一朗氏、筑波大学名誉教授の北原保雄氏の講演を聴くことができ、大きな収穫を得ることができました。

研究が無事にできたことは、とても嬉しく、周りの方の思いやりに感謝しています。

研究所の開設をして下さった久貝勝盛教育長、温かいご指導、助言をして下さいました島袋正彦所長、本村幸雄指導主事、平良吉嗣指導主事、教育事務所の饒平名和枝指導主事、伊志嶺吉作教育相談員、また、多忙の中、気持ち良く指導して下さいました琉球大学の緒方茂樹教授に感謝の気持ちを申し上げます。

それからいつも、温かい笑顔で勇気づけてくれた教育研究所の職員、ありがとうございました。また、学校へ行くと優しく励ましてくれた、久松小学校の菅間雅子校長先生、優しい心遣いに感謝致します。

研究との出会いは私にとって宝です。この研究で音読の効果を改めて知ることができ、とても良い機会となりました。今後、現場へ戻って音読を継続し、音読の相乗効果の素晴らしさを広めていきたいと思えます。

研究ができたことに感謝し、心からお礼を言いたいと思えます。

「ありがとうございました。」



研究生活をふりかえって

平成 18 年度後期（第 1 期）研究教員
宮古島市立平良第一小学校
養護教諭 乾 麗子



養護教諭の仕事について 29 年が経ちました。日々の職務の中で、けがの手当は少なくなり、心のケアを必要とする児童が増えてきている現状があります。前々から教育相談について深く学びたいと思っていた矢先、宮古島教育界の悲願であった宮古島市立教育研究所が開所し、第一期生を募集していると知った私は、迷わずに研修の応募をしました。念願かなって、第一期生として「教育相談について」研究できとても幸せでした。月日の経つのは早いもので、あれから 6 カ月が経ちました。

さて、これから私の半年間の研究生活のアルバムを開いてみたいと思います。平成 18 年 10 月 2 日（月曜日）午後 2:00、全身に心臓があるかと思うぐらいにドキドキして臨んだ入所式、そうそうたる参加者の前で緊張のあまり研究生としてのやる気を、うまく伝えることができず、入所式終了後落ち込んでいたことが昨日のこのように、鮮明に思い出されます。

しかし、研究所の本村幸雄指導主事や平良吉嗣指導主事の優しい心配りで、徐々に緊張感もとれ、研究生活を「心地よい緊張感」「ちょっとしたプレッシャー」を感じながら進めることができました。ありがとうございました。

前半の 3 ヶ月間はちょっと余裕があり、笑顔も絶えませんでした。もちろん、研究テーマ設定や研究構想図の検討会にたどり着くまでは相当悩みましたが……。後半の 3 ヶ月は、すてきな与那覇湾の風景に目を向けることもなく、本当に昼夜を問わずパソコンとにらめっこ状態で、一生懸命に頑張りました。ちゃんと計画通りに進めたつもりでしたが……。でも、それはそれで良かったと思っております。これらのことが、研究の成果につながったと思っております。

また、もう一つの成果として、研究生活を支えて下さった皆様方との出会いです。同じ屋根の下で共に暮らした皆さんとの間に確実に芽生えた「愛情は」は生涯忘れることのできない宝物となりました。研究所の所長を始め、職員の皆様、知の側面、心の側面からの惜しみない支えをありがとうございました。

また、この成果を得ることができたのも、宮古島の教育界の長年の夢であった宮古島市立教育研究所の設立に、ご尽力いただいた皆様のおかげだと心から感謝いたします。ありがとうございました。

また、私が研究所へ行くことを両手をあげて賛成をし、快く送り出して下さった校長先生本当にありがとうございました。

下地街道並木のももたまなが、日増しに黄緑の芽がふえていくことを楽しみながら、研究所へ通いました。学校現場を離れて自分の仕事を見つめ直す機会が与えられ、とても充実した研究生活を送ることができました。この研究生活で得た多くのことを、これからの教員生活にしっかりと生かし、新しい時代を担う、子どもたちのために、頑張っていきたいと新たな決意をしております。

最後に、第一期生として、充実した研究ができたことに感謝をし、今後は宮古島市立教育研究所の広告塔として、研究することの大切さ楽しさをアピールして、研究所が益々発展していくことをお祈りし、私の「研究生活をふりかえって」の思い出のアルバムを閉じたいと思います。ありがとうございました。